

国債の回り方

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長 おお いし ひさ かず
大石 久和



国債を増発などしたら財政が破綻すると言いつつ続けてきたわが国だが、コロナショック不況による内需の喪失とそれに伴う雇用の危機には立ち向かわざるを得ず、二次補正予算までに約67兆円もの国債を新たに発行することとなった。

しかし、このように過去に例のないほど国債発行を増発しても、国債金利は上がるそぶりも見せていない。つまり、財政破綻の兆しなど何もないのである。

政府は国民の最大にして最終の保険機関であるから、いまこそ政府がその役割を果たして国民の困窮化を防がなければならない、今回は、少なくともここまでは日本の政府や政治は、遅まきながらもそれなりに機能してきたと言える。

しかし、注意しておかなければならないのは、財政再建至上主義の主流派経済学者やそれと共同の歩調を取るメディアがこの状況を異常と捉えており、またぞろ「この国債償還のために、やがて増税しなければならない」との考えを少しずつ、かつしつこく繰り返し始めていることなのである。

今回はこの実態を紹介し、この考えが間違いのかたまりであることを示す。

2020年6月29日の読売新聞は、「国債ってどんなものなの？」というコラムを掲載したが、これがツッコミどころ満載の説明なのである。

「(国債とは) 国がサービスなどを行う資金を集めるための債券です。債券は平たく言えば借用証書みたいなものですから、国債は国の借金を意味します。」

上徳不徳で何度か連載してきた「財政をめぐる七つのウソ」を読んだ読者は、「国の借金」との表現を見ただけでいい加減な説明をしようとしていると感づくことと思う。政府と国民からなるのが国であるから、「国が借金をしている」ということは、政府と国民とがどこかの国や機関などから借金をしていることになる。

実際は、政府が国民から借りているのであるから、「国の」とは言えないにもかかわらず、日本国が世界中から借りまくっているから大変だと人々に不安を与えようとする印象操作なのである。借金は国語辞典的な説明では「金銭を借りること。また、借りた金銭」(明解国語辞典)と説明するように、基本的に個人や家計・企業会計の用語であり、財政に使うにはふさわしくない言葉なのだが、実際どうだろうか。

建設国債で公共事業をやるとして具体的に解説してみよう。

国土交通省（政府）は建設費100億円のトンネルを建設することを企画し、その資金を建設国債で調達することにした。そしてA銀行がその国債を購入した（実際には、個別の事業を実施するたびに国債を発行しているのではないが、対応がわかりやすいようにこう説明している）。

このことは実際には何が行われたかというところ、A銀行が日銀に保有している日銀当座預金100億円分が政府の日銀当座預金に振り替わったのである。ここではA銀行が自行の預金をかき集めて国債を購入したのではないことに留意しておきたい。

その裏付けを得て政府は甲建設にトンネル工事を発注する。トンネルが完成すると、政府は100億円の政府小切手を甲建設に交付する。甲建設は自社の取引銀行であるB銀行に政府小切手を持ち込み、政府からの代金の取り立てを依頼する。

政府小切手を得たB銀行は甲建設の口座に100億円と記帳するとともに（この瞬間に現金100億円が生まれている）、100億円を政府から取り立てるよう日銀に依頼する。すると日銀は政府の日銀当座預金から100億円をB銀行の当座口座に振り替える。

先にA銀行の日銀当座預金が政府の日銀当座預金に振り替えられたが、今度はB銀行の日銀当座預金に同じ金額で戻ってきたのだ。国債を発行して銀行がそれを購入することで財政支出をしても「銀行全体の日銀当座預金合計に変化はない」のである。

以上の説明で明らかなように、この国債を発行したことによって「社会に流通する資金の量をまったく減らしておらず、むしろ増やしていること」に注目すべきなのだ。したがって、国債発行によって金利が上昇しないのは当然のことなのだ。

政府に建設国債を償還する責任が生じてはいるが、トンネル建設が雇用や資材の需要を生んでデフレの脱却に寄与した。また、新しいトンネルが未来にわたって末永く経済の効率性を向上させ続け、これによって日本経済は成長して国民が豊かになるのである。

なお、この建設国債は永久に借り換えを行ってもなんの問題もなく、現に国債償還を予算に計上している国など世界の主要な国のなかで日本だけなのである。

これは、個人や一企業が銀行からお金を借りる場合に似ている。「ラジオ国土学入門」でも説明したが、X氏が銀行からお金を借りて新しい事業をやるとしよう。X氏がお金を借りることができるのは、銀行がX氏を信用している（返済能力を含め）からである。

もし信用できるとなると、銀行はX氏の口座に所要の金額を書き込んで貸し付けが完了する。銀行の預金者のお金をかき集めてX氏に渡しているのではない。イングランド銀行はこれを「万年筆マネー」と呼んでいるが、今なら「キーボードマネー」と言うところだ。つまり、X氏の信用が新たにお金を生み出したのである。

そして通貨発行権を持つ政府は限りない信用を持っていることから、国債発行に限度はないと言えるのである。